

奉天市政公所の水道計画に関する考察

殷 志 強

Abstract

The purpose of this paper is to conduct a research on the progress of the discussion about the plan of water service in Mukden through the exploration of the provincial government and municipal archives. In addition, the public health of the Northeast urban areas in the Republic of China and the measure which has taken by the Mukden government is analyzed. After the founding of the municipal government, in order to achieve the peace and happiness in the Northeast region, the local civilian official of Mukden began to develop municipal infrastructure. Unfortunately, because of complex internal unrest, Tso-lin Chang was absorbed in unjust militaristic policy, which brought deficit financial and political instability for the Northeast. The effect of the militaristic policy was the plan of water service in Mukden could not be practice in the 1920's. Especially, because of the Manchurian Incident, the dream of Chinese people to construct the water service by themselves has been broken. Although the plan of water ultimately could not been realized in the 1920', but we can still sense that the local civilian official in Mukden, for example Yong-jiang Wang and Den-xin Li made great efforts in this period.

キーワード……市政公所 水道計画 公衆衛生 奉天市

はじめに

本稿は、張作霖政権あるいは王永江を中心とする「文治派」が主導した都市のインフラ整備、いわゆる奉天市政公所の成立以降における奉天市政の改善と発展およびそれをめぐる諸問題を明らかにすることを課題とする。従来の研究を踏まえながら、特に奉天省公署と奉天市政公所の档案と文献を分析し、市民生活に関わる奉天市政公所の水道計画の経緯を探りながら、民国時代の都市衛生状況および政府の対応について考察したい。

張作霖はひそかに袁金鎧や馮徳麟など奉天地方実力派と連携して袁世凱の腹心である元奉天巡按使段芝貴を奉天から追い出す一方、在地有力者の支持を得て中央に「奉人治奉」を要求した。その結果 1916 年 4 月、張作霖は奉天盛武將軍に任命され、また奉天巡按使を兼任して、奉天省の権力の頂点に達した。これによって張作霖は東北地域に政権を樹立し、さらに全国制覇への道を開いた。これまでの中国の学者の研究は、張作霖の経済活動¹⁾や財政改革²⁾や軍事改革³⁾などを議論の中心としてきた。一連の経済・軍事政策を実施する際に中心的な役割を果たし

た王永江の経済思想⁴⁾、諸政策の実施過程⁵⁾、張作霖とのせめぎ合い⁶⁾なども研究者のもっとも関心をもってきたところである。しかし、これらの政策の実施を支えた在地の実力者の活動と影響についてはあまり研究されていない。それに対して、日本の学者はその空白を埋める成果を生み出している。例えば、江夏由樹は奉天省の土着勢力の代表的な人物である袁金鎧を考察し、在地勢力と公権力の関係、また奉天の旧勢力がどのように張作霖政権を支えたかを明らかにした⁷⁾。また、松重充浩は張作霖が「保境安民」期に展開した諸政策（対内安定策・軍事強化策・財政強化策）の内容を検討しながら、張作霖が如何に東北地域に支配的な権力基盤を作り上げたかを明らかにした⁸⁾。さらに、「兌換問題」の解決や「第三革命」などの問題の検討を通じて、奉天省の有力者が自らの利益を守るために張作霖政権の支持基盤となったことを指摘した⁹⁾。しかし、張作霖の軍事力拡大によって生じた増税などの負担への地方実業者の不満や反発に関しては十分に言及していない。軍事と民政どちらか優先するかという議論は張作霖と王永江の施政理念の核心的な相違点である。張は武力をもって全国を制覇しようと考えたのに対して、王は一生を通して「保境安民、造福桑梓」の理想に精力を傾けていた。前述したように、王の軍備縮小・財政整備・民族実業発展をめぐるはずで多くの研究がある。ただ、一般民衆に最も関わる奉天の市政に関する研究¹⁰⁾は十分に行なわれているとは言えないだろう。

1 奉天市政計画と市政理念の変化

1.1 王永江の施政理念

1920年6月、王永江は奉天省長代理に任命され、一連の行政改革や人事調整を開始した。各県の知事を養成するために「県知事学」という文書を作成した。その中で王は、共同で新生活を切り開くために、悪性の官吏の除去、実業の振興、農業施設の整備、教育の重視などの課題に触れている。しかし、ここで強調したいことは王永江の都市衛生事業を重視する考えである。王は「人類社会に生きるために、まず強壯な体が必要である。それがあれば他の事業の発展を図れる。故に衛生ということは東西の各国はすべて重要な政治課題としている」¹¹⁾と述べて、都市衛生を市政の重要な課題として位置付けた。民衆の幸福を施政の最終目的に置いた王永江は、最初からそのための市政の改善に全力を挙げる姿勢を表明した。

1.2 技師たちの都市図

また市政に専門知識を持つ新たな技師も、奉天の近代的な都市建設構想を積極的に示した。例えば、1924年には瀋海鉄道の工程課長である張国賢¹²⁾が「奉天省市政計画書」を発表した。張は市政工程の各項目を人体の各器官に例えている。「市政機関は街市の如く、官

吏は街市の精神の如し。電燈はまるで街市の両眼のようであり、電話電報は街市の耳のようである。上水道は血液の循環の如く、下水道は胃腸の排泄の如し。電車は筋であれば、橋は骨節である…花草樹木・公園・建築物は衣服など飾りのようである。以上の項目は一つでも欠くことがあれば、人は完全無欠な人ではなく、市政は完全な市政ではなくなる¹³⁾と中国本土で育ってきた技師も、近代都市のインフラ整備に注目し、専門的な視野から奉天の市政建設に力を注いだ。

1.3 市政公所の成立と市政の改善

奉天市内の市政管理を実施するために、1923 年 1 月から市政公所設立のための準備が始められた。まず、委員を設け、分別調査計画をした。また、数十人の専門家を集めて数カ月間慎重に討論した上で、行政の各項目を決めた¹⁴⁾。5 月 3 日、市政公所籌備所が成立された。曾有翼が所長に任命された。曾は市政公所の職能範囲を規定し、将来の市政事業に関するさまざまな構想や組織条例を公表した¹⁵⁾。8 月 1 日、「奉天市公所暫行（暫定）章程」が公布され、奉天市政公所が正式に成立した。市政公所は市政管理の専務機関としての機能を果たし始めた。この章程によると、奉天市政公所は以下のような事務を担当していた。

- 1、市財政及び市公債
- 2、市の公有財産及びその管理
- 3、市街道路溝渠建築及びその他の土木工事に関する事業
- 4、市公共衛生及び公共事項
- 5、市の戸籍及び市選挙
- 6、市教育風紀及び慈善事業
- 7、市交通電気石炭水道及び他の公共事業
- 8、省政府委任辦理事項

また、表 1 に示したように、奉天市政公所の内部には六つの事務課があり、それぞれの任務を通して、近代的な市政管理を実施しようとしている。財政にも、工程管理や技術の面にも、専門的な責任者を配置した。衛生の管理が市の重要な課題になったことも市政進歩の象徴であろう。本稿が注目する水道の建設に密接に関わる部門は工程課である。

表 1 市政公所の事務一覧：

総務課	市の選挙、文書、統計報告、職員の進退、市政公所の経費・予算・決算、庶務
財務課	市費の徴収、市公債、市公有財産、省庫補助金の管理、全市行政経費予算、その他の財務
工程課	市区の計画、建築及び道路・橋梁・溝渠・水道・電車、植樹、公園の管理、測量、その他の市工程
衛生課	街道及び公衆便所の清掃、公立市場・屠畜場・浴場の管理並に劇団・旅店・妓館等に対する取締、検疫所及び各伝染病院の設立管理、戸籍調査管理、その他の衛生事業
教育課	市立及び私立各学校の管理、図書館の管理、市民風紀の維持、劇場及び娯楽場の管理、慈善事業
事業課	電気・電車・水道・石炭・及びその他の公共事業の経理、商辦事業の回収・管理、自動車・馬車・人力車及び河船の取締、

注：「奉天市政公所章程制度」より作成、JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B03050189400 (第 0437-0440 画像目) 各国内政関係雑纂/支那ノ部/満洲第十三卷 (1.6.1)、(外務省外交史料館)。

2 20年代における奉天市内の水道問題

奉天における上水道の歴史は1912年に幕を開いた。水道創設前において奉天市民の一般給水は公共井や私設井に依存していた。1912年、満鉄付属地の上水道が起工された。1914年、千代田公園内に内径9メートル、深さ10メートル、側壁煉瓦作りの第一号水源井が、唧筒室及び同公園前広場に容積450トン有する旧給水塔が築造された。当初の計画では給水人口を5万人と想定し、1日1人あたり0.1立方メートルと定めていた。工業用水を加えれば1日の用水量は6,000立法メートルになった。第一号井の1日7,000立方メートル以上の湧水量は、当時の需要を満たしていた。1915年1月に一部の給水が始まった。1923年、さらに水の需要を満たすために、第一号井と同型の第二号水源井を増設した。1928年に至り、配水区域の拡大による、需要水量の増加のため配水圧の不足が生じた。最大用水量は1日約9,500立方メートルに達したので、給水量1日12,000立法メートルの新計画が立案された。1929年に、また千代田公園内に内径10メートル、深さ12.50メートルの鉄筋コンクリート造りの第三水源井を増設すると共に、筒壁式鉄筋コンクリート造りの、水槽内径14.30メートル、有効水深7.30メートル、有効容量1,200立法メートルの新給水塔も建設した。なお、1930年に唧筒室を拡張するとともに唧筒位置を低下し、給水管を深くし、水源井の湧水量を増大させた¹⁶⁾。このように満鉄付属地

と商埠地の一部には上下水道が設置された。だが奉天城内にはほとんど上下水道がないままであった。この間、奉天市の都市化に伴い、人口が増加し、工業も発展した。そのため、伝統的な水源は汚染され、市民の飲用水の水質は徐々に悪化していた。1915年の『満州日日新聞』に「奉天の水道問題」という記事が載っている。その記事は張作霖の排日行為のせいで日本人商人の日中合弁の水道事業構想に裏切られたと不満を記しているものの、奉天城内の衛生状況も明細に書かれている。

奉天は人口二十万の都会にして、其の反映満洲に冠たり、陪都の称空しからずと謂うべし、然れども其の衛生状態如何と顧みれば、一として文明的なるはなく、上下水道の設備欠け、道路の修繕整わず、雨降れば泥濘靴を没し、天晴るれば沙塵面を撲つ、其不潔なること言語に絶せり、殊に甚しきは飲料水の不良にして、城中随所に鑿たれたる掘井は其の質既に不良なるが上に、僚水浸透し塵埃混入して、益々不良ならしめ、之を附属地の上水に比すれば、殆んど清水と濁水との別あり、積年の習慣として城中の支那人は之を引用し居れども、彼等も亦清濁良悪の差あるを知らず、唯水道敷設費の巨款となるを以て、今日まで未だ水道敷設に至らず、忍んで不良の濁水を引用し居るのみ、就中悪疫伝染病等の城内に流行するは、飲料水の不良に起因すること支那官民の熟知する所にして、水道敷設の急要は之を認めざるにあらず、時機と資源の関係は今日迄遷延せしなり。¹⁷⁾

奉天城内の市民の飲用水状況を確保する市政公所は成立直後に上水道事業を最急務として取り組んだ。しかし水道工事は大規模であり、また歴大な経費が必要と予想されていたため、これを直ちに実行に移すことはできなかった。そこでまず、人口調査、水源地、地形、標高などを十分調査した上に計画を立てることになった。利権の流出を防ぐこと、また市民生活に密接にかかわるなどの理由から、これを外国資本や私営資本によって建設することもできなかった。第二次奉直戦争で歴大な資金を軍事費に投入したため、市政に当てられる経費は年間 300 万円しかなかった¹⁸⁾。こうした理由によって、奉天市の水道工事計画は 1923 年以来数次の修正変更を経て、本格的に建設に着手されたのは 1930 年であった。ここで、その間の複雑な準備活動の実態を考察したい。

2.1 1923 年の計画案

現存する市政公所の水道に関する文書を見ると、最も早いものは 1923 年の市政公所が作成した「自来水説明及び概算表」¹⁹⁾である。この計画案は潤富会社が計画した案に基づいてそれを修正したものである。

この潤富会社の三期に分けて竣工する案に対しては、設備の費用が甚だしく巨大であるため、もし利用者数が少なければ欠損を生じることは避けられないと認識されていた。そこで工事を

九期に分けて人口密度が高い区域、すなわち城内及び東関南部を第一期として開始し、次第に全域に拡張することに修正された。具体的には、表2のようになった。

表2 1923年市政公所案の地域区分

期別	一	二	三	四	五	六	七	八	九
区域	城内及び 東関南部	西関	北関	東関北 部	南関	東南模 範区	西南住 宅区	西北工 業区	商埠地
居住人 口	7万余	6万 余	5万余	2万余	3万余	不明	不明	不明	不明
用水人 口	5万	4万	3万	1万5 千	2万	1万	1万	1万5 千	2万

出所：「奉天市政公所自来水説明書」、奉天市政公所档、卷宗号345、瀋陽市档案馆所蔵。

また、水道管については、潤富公司案が高価な木管（全体で32万元相当）を使うことになっていたので対して、鉄管は逆にコストが低いと判断した。しかも第一期工事に必要とされる水道管材料を合計しても26万元近くに過ぎないため、自力で鉄工場を創設し鉄管を作れば一石二鳥であると楽観的に考えた。

給水料金については、普通の井戸水の50斤每銅元一枚に対して、市政公所は60斤每銅元二枚とした。

水源地については、渾河を水源地とする他に、別の二つの方法を考えた。一つは溝を掘って渾河の水を小河沿まで引き込んで濾過し、給水塔に送る。もう一つは八王寺や小河沿に大量の井戸を掘り、この井戸水を汲みあげて給水塔に送る。この二つの方法により遠距離の水管理設より現大洋16万あまりを節約することができるはずであった。ただ、各給水区域の標高や水量などを確実に調査していなかったため、計画通りの実行は困難であることが明らかになった。このため、渾河を水源地とし、水道管は購入するという形に改められた。

この計画に対して、奉天省公署は「この計画は詳細であり、承認する²⁰⁾」という指示を出したが、水道管の選択問題や水源地の問題などを再検討する必要があるため、なお詳細に審査し、予想外の害を残さないようにしようとした。結局、市政公所の1923年案はそのままになり、実現できなかった。1923年の関東庁警務局が日本外務省のアジア局などへの情報報告²¹⁾によると、当時市政公所の計画案は着々と準備されたものの、容易に進捗しなかったという。その理由として水道事業に要する費用は僅かではなく、とりわけ、軍備に多大な経費を要する奉天の財政において難しい課題だったという。張作霖にとって一番重要なのは第二次奉直戦の準備であるため、東三省兵工廠の成立に膨大な資金を投じていた。1923年の軍費支出は2040万元で、財政総支出の81%を占めると言われている。

2.2 1926 年の議員建白書

1926 年 9 月 28 日、奉天省出身の衆議院議員張嗣良は「省城自来水公司を創設する」²²⁾など三つの議案を提議した。その提案は第二次奉直戦や郭松林事件により一時的に沈滞している水道建設の声を再び盛り上げさせ、奉天城内の水道建設事業に拍車をかけた。

省城には急いで自来水公司を創設するべきだ。現在ではすべての大都市や港はみな自来水公司を持ち、便利を図っている。公営にせよ、官商合辦にせよ、所用費用は奉大洋 300 万に過ぎず、三年間には投資を回収することができる。その後、年間の純利益は 100 万に達する、喜んでやらないわけがないだろう。ただし、外国資本は制限しなければならない。万一不幸にも国際関係が平和を失ったら、水道管を塞いで断水したり、毒を入れたりなどの事態が生じるかもしれない、これは市民の生命と関わるので防がなければならない²³⁾。

この議案を受けて、10 月 6 日東三省軍政督辦は奉天省公署に「張の陳述する内容はかなりの見識を有している。該公署は詳細に調べ合わせることに²⁴⁾」という訓令を出した。同月 22 日、政務庁長は市政公所と財政庁に訓令を送り、張の提案に対応する両機構が合同で協議するよう要請した²⁵⁾。

11 月 24 日、奉天市財政庁長の莫徳恵と奉天市長の李徳新（東京帝国大学政治科卒）は政務庁に返事をした。その中でまず、水道事業は市民の飲料水と密接にかかわっているため、全面的・徹底的に計画しなければ手抜きを防ぐことはできないと、水道事業になかなか着手できない理由を説明した。また、李市長は着任してすぐに英知を集めるために調査員を指定して各事情を調べさせた。『奉天時報』²⁶⁾などの新聞紙で水道の専門的人材を招聘しようとした。その他、参考のため、兵工廠・東北大学工廠・大亨工廠などに水道鉄管及び付属品の価格を推算するための要請書簡を送った。さらに、慎昌・逸和・西門子・斯可達などの洋行及び兵工廠が推薦された日本水道鑿井公司の高山技師などと相次いで市政公所で打合せを行った。要するに水道事業の準備作業は相当地に進んでいることを表明したのであるが、しかし現実にはさまざまな理由から水道建設の実現への道は予想より困難であった。

2.3 1927 年の水道事業を見合わせる案

1927 年 8 月 8 日、奉天市長李徳新は奉天省公署に作り上げた城内水道計画及びその予算表、営業収支概算表、水源地及び給水区域図を提出するとともに、水道事業の所要費用（市政公所が用意する部分を除いて）50 万現大洋を要請した²⁷⁾。

その計画は主に人口密集の城内区を第一期の給水区域として立てたものである。大小北辺門外の間にある居住区南部の区域は水源地として選ばれた。そのあたりで適当に深さ 20～25 メートル、直径 12 メートルの井戸二つを掘り、井壁を煉瓦あるいは鉄筋コンクリートで固める。一

日の出水量は 7,000 トンと想定し、初期計画の配水人口 5 万人、一人あたり用水量 0.06 噸、総量 3,000 トンを十分まかなえるところとした。仮に将来配水区域を拡大し、全市人口数が 50 万人まで増えても、井戸の数を三つ増加して供水能力を 35,000 トンまでに向上させることは難しくことではないとしている。

表 3 第一期配水区域内の人口及び需要量

区域	人口	日需要量（一人あたり 100 斤計 0.06 トン）
小東門分所	2898	175
小南門分所	1982	120
大南門分所	1435	88
文廟分所	1287	79
公署東分所	1140	70
大北門分所	3307	200
法政学校分所	3220	195
西華門分所	2124	129
通済倉分所	2225	135
大西門分所	2018	123
小北門分所	3890	235
小西門分所	2778	168
皮行分所	3938	238
賈記胡同分所	4360	162
潜徳胡同分所	2729	163
大東門分所	1781	110
合計	41112	2460

出所：奉天市政公所档、卷宗号 514、「呈省長為拟具第一期自来水計画予算請拨款事由」（瀋陽市档案馆所蔵）。

これを受けて 8 月 22 日に、奉天省長公署は市政公所に指令を下した。市政公所が請求した 50 万の支出金を省の財政から出すことを認め、許可するべきだと判断した。施工の適切性、予算の確実性などを確かめるために、技師の毛鵬程を派遣して現場調査させ、その結果次第で結論を出そうとしていた²⁸⁾。奉天省公署は明確に市政公所の計画と予算を否定せず、かといって賛成もしていないという極めて曖昧な立場に立っていた。

毛鵬程の報告を受けて奉天公署の態度は一変し、市政公所の請求を拒否した。9月23日、市政公所が提案した自來水事業を一時見合せするという命令を下した²⁹⁾。その理由は主として計画の未熟と技術面の欠点にあった。今回の自來水計画及び計画図は初の試みであり、かつ簡単な計画に過ぎず、現場の工事に関する詳細な調査や計画がなお欠如している。また、水源地の出水量の多寡や水質の善し悪しについては確認しないと使用できない。水道管を埋設するためには、奉天市の地形図を精確に測量しなければならない。ただし、これらの理由はある程度説得力があるとはいえ、本当の原因は財政難の問題であったと考えられる。9月7日、張作霖は莫徳惠省長に電報を送り、第一期自來水事業に関して一切財政資金を分配してはいけないと命じた³⁰⁾。すなわち李市長の水道建設計画が莫徳惠を中心とする省公署の承諾を得ることができて、すでに中央政権に権力欲を伸ばしている張作霖は奉天市の市政建設にあまりにも関心を寄せなかったため、この計画は一時的に延期せざるを得なかった。奉天市政公所が精力的に推し進めた水道事業の創設運動は低迷期に入っていった。

表 4 張氏政権時代における奉天の主要ポスト

時期	省長	市長	財政庁庁長
1917年6月	張作霖（兼）	なし	王永江
1920年6月	王永江（代）	なし	王永江（兼）
1923年8月	王永江	曾有翼	王永江（兼）
1926年3月	莫徳惠（代）	曾有翼	莫徳惠（兼）
1927年3月	莫徳惠（代）	李徳新	莫徳惠（兼）
1927年10月	劉尚清	李徳新	劉尚清（兼）

2.4 1928年における水道事業再開請求

1928年4月、李市長は莫徳惠に替わって就任する奉天省長の劉尚清に請求書を送り³¹⁾、一時中止されていた奉天市内水道建設の再開を申し入れた。李市長はこれまでの申請と審査の経過をたどり、特に前任の莫代理省長時代の方針について述べた。李市長は、さらに次のように指摘した。省公署が取った万全策を期する慎重な姿勢については納得できるが、水道は市民に飲料水を提供し、また保健や公衆衛生に関わるものであるもので、市政計画の根本として、最も優先的に解決されるべき課題である。ところが、奉天市政が始まってからすでに五年間を経ても水道事業に本格的に着手できないことは極めて遺憾である。ちょうど融雪の季節であるので、工事の完成を目指して成るべく早目に着手すべきだと李市長は考えた。なお、今回の施設の建設は實際を重んじ、虚飾を捨て去るので、第一期費用は僅か50万現大洋である。

実は非常に低廉で、極めて経済的である。第一期計画を完成して城内区域の用水を供給し、次第に供水区域を拡大して数年間で全市の範囲まで普及することができる。

この請求を受けて、奉天省長公署は速やかに指令を下した。王有桂を派遣して市政公所の計画案とその予算を確かめることにした。

王有桂が調査した結果は以下の通りである。市政公所が立案した計画書は大きな問題がない。ただし、詳しい施工図や具体的な施工の説明書、地形の測量などを備えていないため、計画の実行が見通せず、また実行できたとしてもその結果はどうなるかもわからない。なぜ市政公所の計画は水道の施工について触れていないか。今回の水道建設は未曾有のことであるので、英知を集めるとの見地から、やはり入札の道をたどる方がいいと考えた。すなわち、各入札者は詳細な施工図案を市政公所に提出し、また市政公所はそのうちの最も優れた物を選ぶということである。しかし省公署は入札により施工図案を決めるという考え方に同調しなかった。「施工図や作法説明書は極めて重要なものであり、もし入札で設計方法を決めたら将来なんでも請負業者の支配に従わなければならない」³²⁾と心配した。結局、さらに詳細な施工図が必要との理由で市政公所の請求は再び拒否された。

2.5 「東北新建設」と水道事業の兆し

1928年6月4日、張作霖は日本関東軍参謀の河本大作中佐が画策した皇姑屯事件で重傷を負い、間もなく死亡した。その「家仇」と「国恨」を背負った張学良は蒋介石を中心とする国民政府との合流を決意した。日本は東北の権益を失いたくないので直接張学良に圧力を加えたが、張は「中国の危急存亡を救うためには、速やかに南北の統一を謀るべき」³³⁾と考え、中国を統一させる決意を崩さなかった。ついに12月29日、「三民主義を遵守し、国民政府に服従し、旗幟を改易す」という通電を発した。いわゆる「東方易幟」である。この事件を契機として中国は形式上の統一を完成させた。12月31日、張学良は南京国民政府に東北政務員会主任委員に任命され³⁴⁾、外交を中央に任せる、東北の政務管理権を引き続き握り、長期間の軍閥混戦を終わらせた。その後、張学良はしばらくの平和環境を利用し、「東北新建設」というスローガンを呼びかけて、軍備縮小・財政整備・鉄道建設・実業の発展などを通じて東北地域の政治、経済、軍事、文化の現代化を促進させた³⁵⁾。奉天の市政建設はこの時期新たなチャンスを迎えた。

1929年1月16日、国民政府の命令により、翟文選を中心とする12人が奉天省政府委員に任命された。とりわけ翟文選は主席に指名された。陳文学は民生庁長、張振鷺は財政庁長、王毓桂は教育庁長、劉鶴齡は農鉱庁長、彭志雲は建設庁長にそれぞれ任命された³⁶⁾。

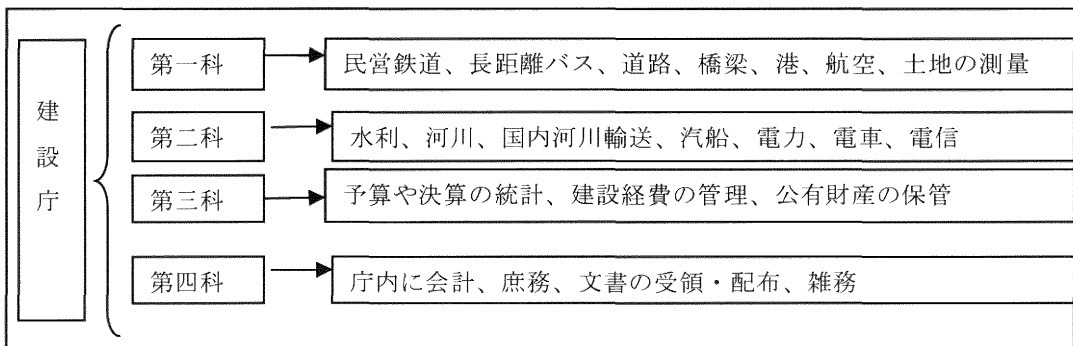
1929年3月1日から奉天省は正式に遼寧省と改称し、従来の奉天省公署の代わりに遼寧省政府が創立され、翟文選が遼寧省政府主席となった。中国では「新官上任三把火」ということわざがある。その意味は「新任者は改革に熱心だ」ということである。新任の翟主席と彭庁長は

ともに水道事業に熱心に取り組み、市政革新を重視する姿勢を示した。図 1 のように、新たに成立した建設庁は道路、港、航空などの交通事業や水利、電力などのインフラ整備に幅広く関わっている。当然、これ以降奉天市内の水道事業も建設庁の管轄下に置かれた。

3 月 13 日、奉天市長の李徳新は翟文選主席に意見書を送った。今回の報告書はこれまでの請求書と違い、水道建設の必要性や計画などを強調するだけでなく、水道事業の実現のための資金問題を中心に議論を展開していた。すなわち、もしある手段で水道建設の費用を集めることができれば、この事業の着手のために大きな一歩を踏み出すと李市長は考えた。

奉天は東北の文化中心であるため、各種の土木工事の建設は延ばすわけにはいかない。特に水道のことは当面の急務である。しかも、初めて敷設するので、巨額な費用が必要とされる。省の財政が逼迫している際には当然水道に投資する余力がない。もともと市公債を発行するつもりだが、市民は公債についてよく知らないのでこれまでの国公債や省公債に対して無関心であり、無理やりに分担させなければ買う人がなかなかいない。だからこそ今回水道に関する市公債を発行しても効果は期待できず、逆に利より弊害が多く生じる。³⁷⁾

図 1 建設庁の組織図



注、「遼寧省政府建設庁組織条例」により作成。前掲『张学良与东北新建设资料选』、140 頁。

このような状況は単純に「官辦」（政府単独出資すること）という形では絶対に成し遂げられないと李市長は判断した。従って、彼は「官辦」を断念し、「官商合辦」あるいは「官督商辦」という新たな考えの筋道を省政府に意見を打診した。3 月 29 日、奉天市は瀋陽市と改称した。

李市長の提議に対して、省政府は第十七回委員会を開き、建設庁でこれを審議して対策を立てるとの方針を決めた³⁸⁾。

建設庁は省政府の指令を受けて、李市長の提議についての審査と議論を開始した。4 月 23 日、彭志雲庁長は主に李市長が提議した「官商合辦」と「官督商辦」の二つの方法をめぐって議論

し、審査結果を省政府に送って、上の判断を求めた³⁹⁾。この二つの方法なら実施できると建設庁は考えていた。ただし、水道・電力・ガスという三つの事業は市政の中で最も重要である。民生に悪影響を避けるために、公営すべきであるが、経費が足りない現段階には「官商合辦、股本平担」（政府と民間資本が共同で出資し、また資本金を等分すること）という方法しかない。しかも、この合弁の年限を二三十年に限定しなければならない。期限が過ぎたら随時民間資本の株を買収することができる、と同時に衛生部も諮問状を省政府に諮問案を申し出た。

飲用水は人にとって不可欠な物である。もし水源が汚染されれば、伝染病の流行を引き起こしやすくなる。故に、飲用水の水質の改良は衛生行政の要である。また、水道は水質の改良の根本的な途である。これは人口が密集している都市として、とくに急務である⁴⁰⁾。

省政府は5月に開かれた第24回の会議で李市長の提議と衛生部の諮問を併せて審議し、おおざっぱな決議を採択した。原則的に「官商合辦」の提議に賛成し、また建設庁に先行計画を作るよう訓令を出した⁴¹⁾。

建設庁は省政府の訓令に沿って直ちに調査研究に入った。市政公所が水道の建設を唱えて以来の記録文書を詳細に検討し、その中の重要な問題、例えば用水量・水源地・取水方式・工事の時期区分をめぐる「水道計画の先決要項」⁴²⁾をまとめ省政府へ提出した。

そこでこの先決要項の内容を詳しくたどり、建設庁の水道開発に関する構想図を考察しよう。

第一に、一人あたりの用水量の多寡は水道工事の設計に密接に関連していた。建設庁の考えから見ると、水の需要量は各地の市民生活習慣や発達程度に関わっているが、原則としては実際の状況に即応しながら、将来のことを予想しなければならない。1923年の市政公所の計画は一人当たり一日の用水量を50斤としている。その後の計画では平均100斤に増加させた。当時市民の実際の用水量をみると、50斤の水は少なくともはなかった。前述するように、同時代の満鉄附属地の日本人が計画している平均用水量は100斤であった。しかし、建設庁は将来の市民の生活改善を考慮して一人あたりの日用水量を140斤と定めた。確かに時代の先頭に立っていたようである。

第二に、水源地について、表5のような四つの選択肢を取り上げた。その四つの候補地の中で、建設庁は八王寺や小河沿がもっとも適切だと考えていた。

表5 水源候補地

	候補地	特徴
甲	渾河	城内との距離は遠く、長い水道管が必要。出水量は多くても、費用は高い。
乙	小河沿	水質ずっと優良で井戸掘り式に良い
丙	八王寺	水質は高品質であるが、小河沿と同様に水量は渾河より少ない
丁	商埠地南部	渾河に瀕し、水質はいずれ飲める。しかし、市内との距離はやや遠い。

第三に、取水方式については、水源地により二つの異なる方法をあげた。もし渾河を水源地とすれば、直接吸水ポンプで河の水を濾過池へ汲みあげて、その後、給水塔まで送るということになる。一方、もし八王寺や小河沿などを水源地とする場合には、井戸掘り式を取り、さらに井戸から水を濾過池へ汲みあげて給水塔へ送ることにする。

第四に、水道工事は巨大な工事であるので、時期を分けるかどうか、また幾つの時期に分けるかという問題をさきに決めなければならないと考えた。それは資金集めや具体的な施工案作成のための前提として欠かせない根拠である。それがなければ、計画はまだ絵空事になってしまう。だからこそ、建設庁はそれを極めて重視し、現地調査しながら工事を三期に分けて進めると提言した。調査の結果、当時奉天城内と商埠地⁴³⁾の住民は約 28 万人に達し、もし一括してすべての人口の給水を提供することになると約 250 万円が必要であった。しかし、一時的に巨額な経費を調達することは無理なので、十万人ずつを基準として三期に分けてやれば、第一期は約 100 万現大洋、残りの二期は約 7.80 万現大洋が必要であると予想した。

第一期の配水区域は城内・商埠地・大北関大街・大西関大街に分布し、給水人口は 10 万以上になる。かつ給水塔・総給水管・ポンプ及び各街道の幹線給水管などの施設は将来の発展規模を予想して全般的に考慮しなければならない。それ故、第一期に 100 万の予算はやや多いと見られるが、実際には長期的な見通しに立った経済的な計画である。

6 月、省政府は第 33 回の委員会を開き、この建設庁の「先決要項」を審議し、建設庁が提議した意見をすべて受け入れた。用水量は 140 斤を基準とした。水源地を乙と丙とする二項目を採択し、取水方式を第二項、すなわち八王寺や小河沿を水源地とすることなどを決定した。さらに、建設庁を中心に水道計画委員会を組織し、建設庁長が委員長、瀋陽市長が副委員長に就任するとしている⁴⁴⁾。

ここまで、長い間に振り返り議論された奉天市の水道計画はついに実行に移す兆しが見られた。しかし、建設庁はその後の二年間に調査研究を続けさせた。1931 年 7 月、李市長は二年間にわたって建設庁が推進している水道事業計画が行き詰まっていることについて、極めて不満を持ち、水道建設の主導権を再び市政公所に返還させようとする願書を省政府に送った⁴⁵⁾。彼は行政システムの紊乱が水道事業を遅らせ、大きな損害をもたらした原因であると考えた。建設庁は建設を専務とする機関であるので、建設事業の一つとしての水道を主管することは間違いない。しかし、もともと水道は市政公所の専務であるため、市政公所が監督すべきである。もし、一時的な環境の変化により、固有の行政システムを破壊すれば、逆に効率を低下させ、また工期の遅れを招致し、おおきな損失をもたらす。従って、彼は、まず責任を明確にして、水道事業の確実な推進を確保するために、この事業を市政公所に任せることが必要であると要請した。

この要請に対して、省政府はどのように対応したかは不明である。2 か月後の 9 月 18 日に、「満洲事変」が勃発し、李市長の水道構想だけではなく、東北全土が日本の支配下に置かれた。

市政公所が成立以来 8 年を経て、特に李市長を中心する市政革新派が心血を注いだ水道計画は未完成のままで終わった。

おわりに

本稿は、1920 年代市政公所が成立以降行った奉天市内水道計画の経緯とその内容を考察した。計画開始から 8 年間にわたり繰り返し議論され、案は修正されたが、最終的に同計画は実施されなかった。その主な理由は以下の三つが挙げられる。

まず、財政の困難は水道計画が難航した要因と考えられる。軍閥混戦の 20 年代に於いて戦争がなにより優先な課題であると張作霖は意識していたため、大部分の予算は軍事費に投入された。王永江や李徳新など「文治派」は「保境安民」の理想を抱いて民生に関する市政事業に全力を尽くしたものの、資金困難の問題に苦しんで、なかなか水道事業を推進しなかった。

次には、水道は東北地方政府に対して未曾有の事業であるので、地形の測量から給水まですべてのことはゼロからしなければならぬ。従って、ほかの道路の建設や電車鉄道の敷設などよりかなり時間がかかった。また、水道は公衆衛生の根本であるので、政府は出資問題や所有権の問題に対して慎重する立場を取った。

最後には、行政システムの混乱により政府効率が低下させた。前文に述べたように、時局の変化により、奉天の行政組織も変動し、特に伝統的な「人治」の社会において、市政事業は行政官僚のトップの変化に大きく左右される。奉天市政公所は終始一貫して水道建設の主導権を握ることができなかった。

満洲事変後、日本に支配された奉天市政公署はその計画を継続し、1934 年 4 月に着工し、経費 80 万元を費やし、1936 年に工程を完成させた。供水区域は城内全域、商埠地、東関、西関、南関、北関、北市場、南市場の一部に達し、合わせて面積 5 千平方キロメートルになったと⁴⁶⁾ 言われる。この詳しい状況は今後の課題として再検討したい。

<注>

- 1) 魏明「張作霖経済活動評述」(『社会科学戦線』1986 年第 3 期)。
- 2) 邱立英「張作霖改革的経済思想」(『北方文物』1997 年第 1 期)。
- 3) 卞直甫「論張作霖の軍事改革」(『社会科学輯刊』1991 年第 2 期)。
- 4) 劉志超「試論王永江の理財思想」(『遼寧大学学报』1989 年第 5 期)；魯岩「論王永江の治奉思想」(『遼寧師範大学学报』社会科学版・2001 年 3 月)。
- 5) 蔣立文「王永江与奉系新政」(『近现代史研究』2007 年第 4 期)；「美」Ronald Suleski 著、姜寧訳「王永江与東三省官銀号の重組」(『史学集刊』2003 年 1 月)。
- 6) 寶応泰「王永江与張作霖の恩怨離合」(『民国春秋』1998 年 05 期)。
- 7) 江夏由樹「旧奉天省遼陽の郷団指導者袁金鑑について」(『一橋論叢』100 巻、6 号、1988 年)。
- 8) 松重充浩「保境安民期における張作霖地域権力の地域統合策」(『史学研究』186 号、1990 年)。
- 9) 松重充浩「張作霖による奉天省権力の掌握とその支持基盤」(『史学研究』192 号、1991 年)。
- 10) この点についての研究は渋谷由里「張作霖政権下の奉天省民政と社会—王永江を中心とする」(『東洋

史研究』52 卷 1 号) がその先駆的な試みである。渋谷氏は張作霖政権を張中心ではなく王永江を中心に考え、特に「保境安民」期から王永江辞任までの時期に行われた財政改革や民政をある程度明らかにした。

- 11) 「県知事学」、奉天省長公省档案全宗、第 4060 号卷、(遼寧省档案館所蔵)。
- 12) 北大土木専門部卒(1922)、奉天省公署技士、吉林省公署技監、産業部建設司工務科長、満洲土地開発会社副理事長(1939.10～)歴任。小都晶子『日本人移民政策と「満洲国」政府の制度的対応』(『アジア経済』XLVII_4、2006.4 9 頁)。
- 13) 張国賢「奉天省市政計画書」(『東方』1924 年)、遼寧省図書館所蔵、17 頁。
- 14) 「奉天市政公所正式開所」、JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.B03041582700 (第 0304 画像目) 関東都督府政況報告並雑報第十八卷(1.5.3)、(外務省外交史料館)。
- 15) 王凤杰『王永江与奉天省早期现代化研究』(吉林大学出版社 2010 年)、174 頁。
- 16) 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会『満鉄附屬地経営沿革史』中巻、龍溪書房、1977 年、677 頁。
- 17) 「奉天水道問題」『満州日日新聞』、1915 年 7 月 18 日付(神戸大学新聞記事文庫)。
- 18) 「奉垣市政改進规划談」『東省経済月刊』(1926 年)、遼寧省図書館所蔵、51 頁。
- 19) 「自来水説明及び概算表」、奉天市政公所档、卷宗号 345、瀋陽市档案館所蔵。
- 20) 「奉天省長公署訓令第 108 号」、奉天市政公所档、卷宗号 345、瀋陽市档案館所蔵。
- 21) 「奉天電車、水道布設計画」、JACAR Ref. B03041582700 (0194-0195 画像目) 関東都督府政況報告並雑報第十七卷(1.5.3)(外務省外交史料館所蔵)。
- 22) 「將軍署為張嗣良創設省城自来水公司由」、奉天省長公署档、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3166-000626 頁(遼寧省档案館所蔵マイクロフィルム)。
- 23) 同前、JC10-0068-3166-000630 頁。
- 24) 同前、JC10-0068-3166-000628 頁。
- 25) 同前、JC10-0068-3166-000629 頁。
- 26) この点については、奉天市政公所档案に二つの文書がある。一つは 9 月 10 日に市報に広告を掲載する要請である。もう一つはその広告の内容である。「為布告适宜本公所現為購求卫生清洁市内饮料起見拟筹办自来水事业为有土木专家富于自来水经验有意承办此项事业者请即来所协议计划体一切以便进行为此布告……」(「奉天市政公所廣告」奉天市政公所档、卷宗号 345、瀋陽市档案館所蔵)。
- 27) 「呈省長為拟具第一期自来水計画予算請拨款興辦由」奉天市政公所档、卷宗号 514、瀋陽市档案館所蔵。
- 28) 「奉天省長公署指令第 1020 号」奉天市政公所档、卷宗号 514、(瀋陽市档案館所蔵)。
- 29) 「据毛鵬程呈勘估市政公所自来水計画由」、奉天市政公所档、卷宗号 514(瀋陽市档案館所蔵)。
- 30) 董慧云、張秀春主编『张学良与东北新建设资料选』(香港同译出版社 1998 年 10 月)、425 頁。
- 31) 「呈省長一为举办第一期自来水拟仍廢续進行請核示」、奉天市政公所档、卷宗号 514(瀋陽市档案館所蔵)。
- 32) 「據王有柱呈報勘驗市政公所第一期自来水計画書」、奉天市政公所档、卷宗号 514(瀋陽市档案館所蔵)。
- 33) 西村成雄『張学良一日中の覇權と「満洲」』(岩波書店 1996 年)、48 頁。
- 34) 東北地域の最高行政機関として成立し、奉・吉・黒・熱の四省を管轄する。中央と東北地方の接点として重要な役割を果たしていた。何度も撤廢する報道があつたが、満洲事變までずっと存続し、1931 年 12 月に新たに成立した北平政務委員会に兼併された。詳しくは康越「对“东北政务委员会”的初探」(『东北易帜暨东北新建设国际学术研讨会论文集』香港同译出版社、1998 年 12 月) 参照。
- 35) 刘忠刚「建设新东北，促进中国现代化—论张学良的东北新建设」(前掲『东北易帜暨东北新建设国际学术研讨会论文集』) 317 頁。
- 36) 「奉天市政公所訓令第十九号」(前掲『张学良与东北新建设资料选』) 33 頁。
- 37) 「市政公所稟为筹办自来水请示由」、奉天省長公署档、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001545 頁(遼寧省档案館所蔵マイクロフィルム)。
- 38) 「事由市政公所函稟为筹办自来水请示办法」、奉天省長公署档、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001547 頁(遼寧省档案館所蔵マイクロフィルム)。
- 39) 「呈覆为审查沈阳市筹设自来水一案由」、奉天省長公署档、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001548 頁(遼寧省档案館所蔵マイクロフィルム)。
- 40) 「奉院令公布提倡办自来水办法請查照飭属建办由」、奉天省長公署档、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001551 頁(遼寧省档案館所蔵マイクロフィルム)。
- 41) 「事由訓令建设厅为筹设自来水办法」、奉天省長公署档、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001557 頁(遼寧省档案館所蔵マイクロフィルム)。

奉天市政公所の水道計画に関する考察（殷）

- 42) 「计划自来水先決要項」、奉天省長公署檔、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001559 —001561 頁（遼寧省檔案館所藏マイクロフィルム）。
- 43) 1929 年 1 月 30 日、東北政務委員会の議決により、省城商埠地は奉天市政公所と合併した。その結果建設庁は商埠地をこの計画に入れた。「奉天省政府訓令第 42 号」（前掲『张学良与东北新建设资料选』）46 頁。
- 44) 「訓令建设庁/瀋陽市政公所為籌辦自来水一案」、奉天省長公署檔、全宗号 JC10-卷軸 0068-案卷号 3178-001562 頁（遼寧省檔案館所藏マイクロフィルム）。
- 45) 「為自来水應歸本所籌辦各緣由」、奉天市政公所檔、卷宗号 3392（瀋陽市檔案館所藏）。
- 46) 夏儒林「關於奉天市上水道」『奉天市之現狀及将来』（奉天市政公署編 1936）第 27 頁（遼寧省圖書館藏書）。

主指導教員（芳井研一教授）、副指導教員（山内民博准教授・広川佐保准教授）